

一、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。(本文には一部改めたところがある)

① わたしたちの「つながり」は、大きく「愛情空間」「友情空間」「貨幣空間」の三層に分かれている。愛情空間は親子や配偶者、パートナー(恋人)との親密な関係、友情空間は「親友」を核として最大で150人くらいの「知り合い」の世界、貨幣空間はその外側に広がる、金銭のやり取りだけを介してつながる**茫漠**とした世界だ。

愛情空間は愛憎入り混じる関係で、友情空間は権謀術数の「政治空間」でもある。会社の派閥抗争からママ友のマウンティングまで、そこではさまざまな権力闘争が繰り広げられる。「親友」が重要なのは、**魑魅魍魎**の政治空間を生き抜くには「ぜったいに裏切らない仲間」がどうしても必要だからだ。それに対して貨幣空間はネットで商品を購入するような関係で、愛憎もなければ連帯や裏切りもなく、ルールどおりにすれば決められた結果が返ってくる。

この図式で考えるなら、現代社会で起きているのは、愛情空間の肥大化と友情空間の縮小、それともなう貨幣空間の拡大だ。

なぜこのようなことになるのか。それは、ネットワークのひろがりによって人間の認知能力が適応できないからだ。

人類が進化の歴史の大半を過ごしてきた旧石器時代では、独自の共通言語(または方言)と葬儀などの文化的慣習を共有する1000人ほどが「社会」を構成していたとされる。だが食料確保の制約のため、全員が同じ場所で暮らすことはできず、日常的には30〜50人の「バンド(野営集団)」と呼ばれる小集団で活動し、150人程度で構成される結束の強い共同体(メガバンド)が生活の中心になった。

これが脳のスペックを決める要因で、一人ひとりの個性を見分けることができるのは50人(バンドのサイズ)が上限で、顔と名前が一致するのはせいぜい150人だ。学校の1クラスの上限が50人で、アイドルグループが48人なのも、年賀状をやり取りする人数や企業の一部門の上限がおおよそ150人なのもこれが理由だろう。

この法則がよくわかるのが軍の編成で、最大1500人の大隊(トライブ/民族集団)を60〜250人の中隊(メガバンド/共同体)、30〜60人の小隊(バンド/野営集団)、8〜12人の分隊(ファミリー/家族)に分け、生死を共にする分隊のメンバーは「義兄弟」にも似た強いつながりをつくる。世界じゅうの軍隊がこのような階層構造になっているのは、西洋式軍制の影響ではなく、脳の認知構造に合わせているからだ。

このように、**脳が人間関係を把握する能力には強い制約がある**。それにもかかわらず、短期間に世界がいきなり拡張してしまったらどうなるだろうか。

生まれてからずっと小さな世界で暮らしていたら、人間関係はものすごく濃密なものになるだろう。狩猟採集生活から近代以前の農耕・**ポクチク**社会まで、人類はずっと「濃い関係」のなかで生きてきた。そんな世界を描いたのが中上健次の小説で、あらゆる出来事が「路地」と呼ばれる小さな部落のなかで起きるが、それが神話や伝説と絡みあって巨大な宇宙(コスモス)を形成する。

だがいまでは、こうした小説世界は成立しなくなってしまった。もはや濃密な人間関係がなくなってしまったからだ。

カナダの社会学者バリー・ウエルマンは、その理由をテクノロジーによってひとびとの世界が大きく広がったからだと考えた。徒歩や馬に比べて、電車やバスなどの公共交通**ギガン**が整備されればひとびとの物理的な移動範囲は拡大する。明治時代はもちろん戦前までは海外旅行はごく一部の特権層しかできなかったが、旅客機の登場でいまでは(感染症がなければ)誰でも気軽に海外に行けるようになった。

それに加えて、電話やインターネットで世界じゅうのひとと会話やメッセージをやり取りできる。新型コロナの新常態では、Zoomのようなウェブ会議サービスを使って世界各国のスタッフとミーティングしたり、海外の大学の授業を受けたりすることが当たり前になった。

その結果、身近なひとたちで構成されるせいぜい150人程度の世界は、理論的には78億人まで5000万倍以上に拡張した。これは大げさだとしても、Facebookの「友達」の上限は5000人で、認知の上限の**④**倍以上だ。そのうえネットワークを介した「友達」は世界じゅうに散らばっているのだから、伝統的な人間関係は環境に合わせて変容せざるを得ない。

ウエルマンは、これを「ネットワーク個人主義」と名づけた。ここでは、「村」「学校」「会社」のような共同体に全人格的に所属する必要がなくなり、ひとびとは多様で分散したコミュニティに部分的に所属することが可能になった。その結果、重層的で密着した「濃い」人間関係が減少する一方で、**⑤**アドホックな(その場かぎりの)人間関係が広がっていく。

【A】

テクノロジーの進歩によってわたしたちは社会的に孤立するようになったといわれるが、これは現実に行きかたを誤り違えている。実際には、わたしたちはより多くのひとたちとつながるようになり、人間関係は過剰になっている。それがなぜ「孤独」と感じられるかというと、広大なネットワークのなかに溶け込み、**⑥**化しているからだ。【B】

人種、国籍、性別、性的指向などを問わず、多様なひとたちが「自分らしく」生きる社会では、当然のことながら、それぞれの主張や利害が対立し、人間関係は**⑦**化する。江戸時代は身分制社会で、相手が武士なのか百姓・商人なのかの身分さえわかれば、どのように振る舞えばいいかが自動的に決まった。【C】

近代になってこうしたルールが撤廃され、すべてのひとが平等になると、一人ひとりの「個性」に合わせて最適な振る舞いをしなければならなくなった。これは大きな認知的負荷をともなうので、人間関係を「面倒くさい」と思うひとが増えてくる。【D】

人生において政治⇨他者との関係が占める割合が小さくなれば、そのぶんだけ愛情空間が拡大し、家族や恋人との関係、すなわち性愛が重要なものとして意識されるようになる。最近の小説やマンガ・アニメは半径10メートル(あるいは5メートル)以内の世界をひたすら描くものばかりだが、これはひとびとの「つながり」の範囲が小さくなっていることに対応しているのではないか。

それと同時に、政治(友情)空間が縮小すれば、その外側にある貨幣空間が拡大するはずだ。子どもの面倒をみてもらうことからペットの世話まで、これまで共同体の濃密なつながりに依存していたことを、わたしたちはどんどん貨幣経済で外^⑧イタイ^⑨するようになってきた。「濃いつき合い」は大きな心理的コストをとまうので、それを金銭的コストで済ませようとするのだ。

産業構造のサービス化によって友情空間が貨幣空間にアウトソースされ、それによって愛情空間が肥大化すれば、友情はいずれ^⑨なものになってしまいうだろう。

(橘玲『無理ゲー社会』による)

(注) * 茫漠 ⇨ 果てしなく広々としているさま。

* 権謀術数 ⇨ たくみに人をあざむく策略。

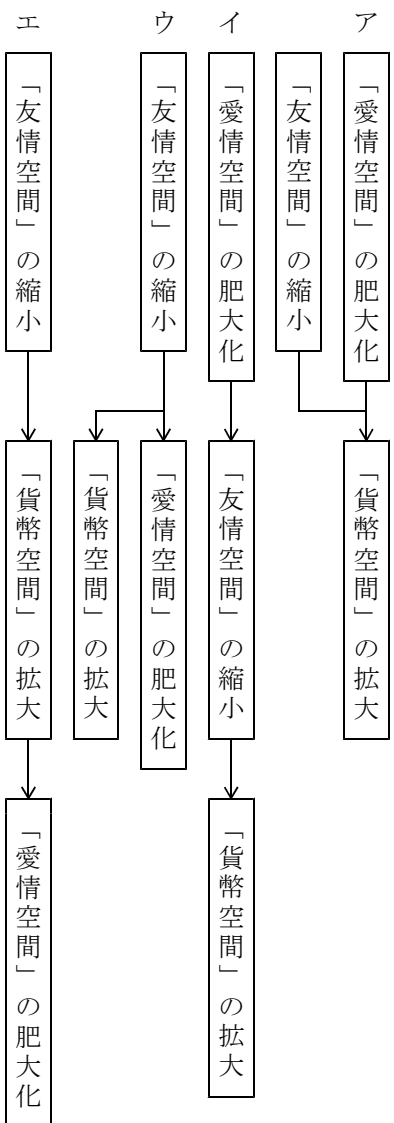
* 魑魅魍魎 ⇨ いろいろな化け物。さまざまな怪物。転じて私欲のために悪たくみをする者のたとえ。

* 義兄弟 ⇨ 兄弟同様の関係を持つと約束した間柄。

* 中上健次 ⇨ 日本の小説家。『岬』で芥川賞を受賞。

問一 二重傍線部④「ノ(びる)」・⑤「ボクチク」・⑥「キカン」・⑦「ダイタイ」を漢字に改めなさい。(楷書ではつきりと大きく書くこと)

問二 傍線部①「わたしたちの『つながり』は、大きく『愛情空間』『友情空間』『貨幣空間』の三層に分かれている」とあるが、この三層の空間の現代社会における関係性を図式化するとどうなるか。本文全体をふまえて、最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。



問三 傍線部②「友情空間は『親友』を核として」とあるが、なぜ「『親友』を核と」する必要があるのか。その理由を述べた一文を本文中より抜き出し、最初の五字を答えなさい。(句読点や記号も一字とする)

問四 傍線部③「脳が人間関係を把握する能力」を具体的に述べた一文を本文中より抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問五 空欄④に入る数字として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 5 イ 30 ウ 100 エ 500

問六 次の一文が本文中より抜けている。【A】〜【D】のどこに戻せばよいか。記号で答えなさい。

これが政治(友情)空間が縮小するもうひとつの理由だろう。

問七 傍線部⑤「アドホックな(その場かぎりの)人間関係が広がっていく」のはなぜか。本文中の言葉を用いて六十字以内で説明しなさい。

問八 空欄⑥・⑦に入る言葉を次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 希薄 イ 単純 ウ 濃密 エ 複雑

問九 傍線部⑧「コスト」(二箇所)を本文中の漢字二字の言葉で言い換えなさい。

問十 空欄⑨に入る言葉を自分で考えて答えなさい。

二、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。(本文には一部改めたところがある)

街は夕暮れの光の中で、淡い金色に輝いていた。その光を浴びながらコンビニエンスストアの前を過ぎまっすぐに歩く。ふっといい匂いがした。焼きたてのパンの匂いだ。

「あら、千穂ちゃん、お久しぶり」

『ベーカリーYAMANO』のドアが開いて、白いエプロン姿の女の人が出てきた。丸い顔がにこにこ笑っている。優しいな笑顔だ。同級生の山野真奈の母親だった。笑った目もとが真奈とよく似ている。小学生の時から真奈とは仲よしで、この店でよく焼きたてのパンやクッキーをごちそうになった。千穂は特に食パンが好きだった。窯から出されたばかりのほかほかの食パンは、バターもジャムも必要ないぐらいおいしいのだ。しかし、

「他人さまのおうちで、たびたびごちそうになるなんて、はしたないわよ。もう、やめなさい。欲しいなら買ってあげるから」

母の美千恵にそう言われてから、『ベーカリーYAMANO』に寄るのをやめた。

美千恵はときどき、食パンやケーキを買ってきってくれる。有名な店の高価なケーキをおやつに出してくれたりもする。けれど、そんなにおいしいとは思えない。どんな有名店のケーキより、真奈たちとくすくす笑ったり、おしゃべりしたりしながら、口いっぱいに頬張ったパンのほうがずっとおいしい。

もう一度、ほかほかの食パンにかじりつきたい。

そんなことを考えたせいだろうか、キュルキュルとおなが音が音をたてる。頬がほてった。やだ、恥ずかしい。

しかし、山野のおばさんは気がつかなかったようだ。千穂の提げている布製のバッグをちらりと見やり、尋ねてきた。

「これから、塾？」

「はい」と答えた。バッグの中には塾で使う問題集とノートが入っている。

「千穂ちゃん、偉いわねえ。真面目に勉強して。それに比べて、うちの真奈ったら、受験なんてまだまだ先のことだって涼しい顔してるのよ。塾にも通ってないし。ほんと、千穂ちゃんをちよつとでも見習って、しっかりしてほしいわ」
そんなこと、ありません。

【A】

千穂は胸の内で、かぶりを振った。

真奈は偉いと思います。しつかり、自分の将来を考えてます。あたしなんかより、ずっと……。

「千穂、これ、まだ誰にも言っていないんだけど……あたし、お父さんみたいになりたいなって思ってるんだ。パン職人」

【B】

今日のお昼、一緒にお弁当を食べていた時、真奈がぼそりとつぶやいた。昼食の前、四時限めに、来年にひかえた受験に向けて志望校をどう決定していくか、どう絞っていくか、担任の教師から説明を受けたばかりだった。

「……高校受験というのは、ただの試験じゃない。きみたちの将来につながる選択をするということなんだ。具体的な職業までは無理としても、自分は将来、何がしたいのか、あるいはどんな人間になりたいのか、そういうことをじっくり考えて進路を選択してもらいたい。自分の意志が必要なんだ。自分の将来を自分自身で選択するという意志を持ってもらいたい」
いつもはのんびりした口調の担任が、生徒一人一人の顔を見やりながら、きっぱりと言いきった。
意志をもってもらいたい。

【C】

「なんかさ、うちのお父さん、普通のおじさんだけど、パンを作ってる時だけは、どうしてだかかっこよく見えるんだよね。作ったパンもおいしいしき。お客さん、すごく嬉しそうな顔して買いに来てるんだよね。なんか、そういうのを見るといいかなって、すごくいいなって。もちろん、大変なものもわかってる。朝なんてめちゃくちゃ早いしき、うちみたい全部手作りだと、ほんと忙しいもの。嫌だなあって思ってた時もあったんだけど……実はね、千穂」

「うん」

「この前、お父さんと一緒にパン、作ってみたの」

【D】

「へえ、真奈が？」

「うん。もちろん、売り物じゃなくて自分のおやつ用なんだけど、すごく楽しくて……あたし、パン作るの好きなんだって、本気で思った。だからね、高校卒業したらパンの専門学校に行きたいなって……思ってたんだ」

少し照れているのか、頬を赤くして真奈がしゃべる。そこには確かな自分の意志があった。

真奈って、すごい。

① 心底から感心してしまう。すごいよ、真奈。

真奈が顔を覗き込んでくる。

「千穂は画家志望だよ。だったら、やっぱり芸術系の高校に行くの？」

「え……あ、それはわかんない」

「だって、千穂、昔から言ってたじゃない。絵描きさんになりたいって。あれ、本気だったでしょ？」

「……まあ。でも、それは……」

夢だから。口の中で呟き、目を伏せる。うつむいて、そっと唇を噛んだ。

山野のおばさんに頭を下げて、また、歩きだす。さっきより少し足早になっていた。

花屋、喫茶店、スーパーマーケット、ファストフードの店、写真館……見慣れた街の風景が千穂の傍らを過ぎていく。足が止まった。

香りがした。とてもいい香りだ。焼きたてのパンとはまた違った別らしい匂い。

立ち止まったまま視線を辺りに巡らせた。写真館と小さなレストランの間に細い道がのびている。アスファルトで固められていない土の道は緩やかな傾斜の上り坂になっていた。この坂の上には小さな公園がある。そして、そこには……。

大きな樹。

枝を四方に伸ばし、緑の葉を茂らせた大きな樹がある。小学校の三、四年生まで真奈たちとよく遊びに行った。みんな、大樹がお気に入り、競って登ったものだ。

あれは、今と同じ夏の初めだった。幹のまん中あたりまで登っていた千穂は足を踏み外し、枝から落ちたことがある。かなりの高さだったけれど奇跡的に無傷ですんだ。しかし、その後、大樹の周りには高い柵が作られ簡単に近づくことができなくなった。木登りができなくなると、公園はにわかに戻屈なつまらない場所となり、しだいに足が遠のいてしまった。中学生になってからは公園のことも、大樹のことも思い出すことなどほとんどなかった。

それなのに、今、よみがえる。

大きな樹。卵形の葉は、風が吹くとサワサワと優しい音を奏でる。息を吸い込むと、緑の香りが胸いっぱい満ちてくる。

千穂は足の向きを変え、細い道を上る。どうしても、あの樹が見たくなかったのだ。塾の時間が迫っていたけれど、我慢できなかつた。ふいに鼻腔をくすぐった緑の香りが自分を誘っているように感じる。大樹が呼んでいるような気がする。

だけど、まだ、あるだろうか。とつづくに切られちゃったかもしれない。切られてしまつて、何もないかもしれない。

心が揺れる。ドキドキする。

「あっ！」

叫んでいた。大樹はあった。四方に枝を伸ばし、緑の葉を茂らせて立っていた。昔と同じだった。何も変わっていない。周りに設けられた囲いはぼろぼろになって、地面に倒れている。だけど、大樹はそのままで。

千穂はカバンを放り出し、スニーカーを脱ぐと、太い幹に手をかけた。あちこちに小さな洞やコブがある。登るのは簡単だった。

まん中あたり、千穂の腕ぐらいの太さの枝がにゅつと伸びている。足を滑らせた枝だろうか。よくわからない。枝に腰かけると、眼下に街が見渡せた。金色の風景だ。光で織った薄い布を街全部にふわりとかぶせたような金色の風景。そして、緑の香り。

そうだ、そうだ、こんな風景を眺めるたびに、胸がドキドキした。この香りを嗅ぐたびに幸せな気持ちになった。そして思ったのだ。

あたし、絵を描く人になりたい。

理屈じゃなかった。描きたいという気持ちが突き上げてきて、千穂の胸を強く叩いたのだ。そして今も思った。描きたいなあ。

今、見ている美しい風景をキャンバスに写し取りたい。

画家なんて大仰なものでなくていい。絵を描くことに関わる仕事をしたかった。芸術科のある高校に行きたい。けれど母の美千恵には言い出せなかつた。母からは、開業医の父の跡を継ぐために、医系コースのある進学校を受験するように言われていた。祖父も曾祖父も医者だったから、一人娘の千穂が医者を目ざすのは当然だと考えられているのだ。芸術科なんてとんでもない話だろう。

絵描きになりたい？ 千穂、あなた、何を考えてるの。絵を描くのなら趣味程度にしときなさい。夢みたいなこと言わないの。

そう、一笑に付されるにちがいない。大きく、深く、ため息をつく。

お母さんはあたしの気持ちなんかわからない。わかるうとしない。なんでもかんでも押しつけて……あたし、ロボットじゃないのに。

ざわざわと葉が揺れた。

そうかな。

かすかな声が聞こえた。聞こえたような気がした。耳を澄ます。

そうかな、そうかな、本当にそうかな。

そうよ。お母さんは、あたしのことなんかこれっぽっちも考えてくれなくて、命令ばかりするの。^⑦
 そうかな、そうかな、よく思い出してごらん。

緑の香りが強くなる。頭の中に記憶がきらめく。

千穂が枝から落ちたと聞いて美千恵は、血相をかえてとんできた。そして、泣きながら千穂を抱きしめたのだ。
 「千穂、千穂、無事だったのね。よかった、よかった。生きていてよかった」

美千恵はぼろぼろと涙をこぼし、「よかったよかった」と何度も繰り返した。

「だいじな、だいじな私の千穂」そうも言った。母の胸に抱かれ、その温かさを感じながら、千穂も「ごめんなさい」を繰り返した。ごめんなさい、お母さん。ありがとう、お母さん。

思い出したかい？
 うん、思い出した。

そうだった。この樹の下で、あたしはお母さんに抱きしめられたんだ。しっかりと抱きしめられた。

緑の香りを吸い込む。

これから家に帰り、ちゃんと話そう。あたしはどう生きたいのか、お母さんに伝えよう。ちゃんと伝えられる自信がなく、ぶつかるのが怖くて、お母さんのせいにして逃げていた。そんなこと、もうやめよう。お母さんに、あたしの夢を聞いてもらうんだ。あたしの^⑧であたしの^⑨を決めるんだ。

大樹の幹をそつとなでる。

ありがとう。^⑩ 思い出させてくれてありがとう。

樹はもう何も言わなかった。

風が吹き、緑の香りがひとときわ、濃くなった。千穂はもう一度、深くその香りを吸い込んでみた。

(あさのあつこ「みどり色の記憶」による)

問一 二重傍線部⑧「傍(ら)」・⑩「芳(しい)」・㉔「傾斜」・㉕「眼下」を平仮名に改めなさい。

問二 次の一文が本文中より抜けている。【A】〜【D】のどこに戻せばよいか。記号で答えなさい。

その一言を千穂が心の中で反芻^{はんすう}していた時、「パン職人」という言葉が耳に届いたのだった。

問三 傍線部①「心底から感心してしまう」とあるが、その理由として適切でないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分とはちがいがい、家業を継ぐという宿命と向き合っているから。

イ 将来のことをしっかりと自分の意志で選択しようとしているから。

ウ まだ中学生だというのに高校卒業後のことまで考えているから。

エ 照れくさい内容の話なのに、ちゃんと言葉にできているから。

問四 傍線部②「今、よみがえる」とあるが、そのきっかけとなったものは何か。本文中より四字で抜き出さなさい。

問五 傍線部③「どうしても、あの樹が見たくなかったのだ」とあるが、それはなぜか。本文中の言葉を用いて三十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④・⑤「ドキドキ」とあるが、この二つはそれぞれどういう心情を表しているか。その組み合わせとして最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア ④期待 ⑤焦り イ ④緊張 ⑤高揚 ウ ④動揺 ⑤驚き エ ④恐怖 ⑤感動

問七 傍線部⑥「あたしの気持ち」とはどういう心情か。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑦「命令ばかりするの」とあるが、お母さんが千穂に命令したこととして適切でないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア 医系コースのある学校を受験すること。 ウ 開業医の父のように医者を目指すこと。
 イ パンをごちそうになるのをやめること。 エ 絵を描くのを趣味程度にしておくこと。

問九 空欄^⑧・^⑨に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア ⑧理屈 ⑨仕事 イ ⑧意志 ⑨仕事 ウ ⑧意志 ⑨未来 エ ⑧理屈 ⑨未来

問十 傍線部⑩「思い出させてくれてありがとう」とあるが、大樹が思い出させてくれたこととして最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 母が自分のことをちゃんと大切に考えてくれているということ。

イ 小学生の時に大樹の枝から足を踏み外して落ちてしまったこと。

ウ これまでは母のせいにしてぶつかることから逃げたこと。

エ 自分は何よりも絵描きになりたいという夢を持っていたこと。

三、次の古文を読んで、後の各問いに答えなさい。

むかし、男^①ありけり。身^{*1}はいやしなから、母^{*2}なむ宮なりける。その母、長岡といふところ^②にすみたまひけり。子は京に宮仕^{みやづか}へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまう^③でず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうしたまひけり。さるに、十二月^{しはす}ばかりに、とみ^④のこととて文^{ふみ}あり。おどろきて見れば歌あり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見^{*4}まくほしき君かな

かの子、いたううち泣きてよめる。

④ 世の中にさらぬ別れのなくもがな千代^{*5}もといのる人の子のため^{*6}

(注) *1 身はいやしなから || 官位はまだ低いままであったが

*2 母なむ宮なりける || 母は天皇の娘であった

*3 まうづとしけれど || 参上しようとしたけれど

*4 見まくほしき || 会いたく思う

*5 もがな || 願望の意味を表す終助詞

*6 千代 || 千年

問一 二重傍線部④「すみたまひけり」・⑥「しばしばえまうでず」を全て平仮名・現代仮名遣いに改めなさい。

問二 傍線部①「男」のことを表している語を本文中より二つ、ともに漢字一字で抜き出さなさい。

問三 傍線部②「いとかなしうしたまひけり」・③「とみのこと」の解釈として最も適切なものをそれぞれより選び、記号で答えなさい。

② 「いとかなしうしたまひけり」

ア 体調のすぐれぬ日々を過ごしていた

イ いつもたいへんうれしく思っていた

ウ とてもかわいがっていらっしやった

エ たいそう元気にしていらっしやった

③ 「とみのこと」

ア いつものこと

イ いそぎのこと

ウ ゆたかなこと

エ めでたいこと

問四 傍線部④「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため」の和歌に込められた心情として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 親の死の知らせを聞いて、もっと孝行をしておけばよかったと後悔している。

イ 年をとってしまったので、生きている間にあなたと会いたいと切望している。

ウ 死別を避けることはできないので、できるなら一緒に死にたいと思っている。

エ 親との死別は避けられないものの、少しでも長く生きてほしいと願っている。

問五 本文は『伊勢物語』の一節であるが、この作品が成立したのはいつの時代とされているか。その時代を漢字二字で答えなさい。